

2-2. 沖山剛造家住宅について

1) 写真帳にみられる沖山剛造家住宅と竣工年代

当時のブラジルにおける日系移民住宅については、いくつかの資料に当時の記録が残されている。そのうち、本稿で調査研究の対象としているレジストロについては『伯刺西爾イグアッペ植民地創立廿周年記念寫眞帖』（以下『イグアッペ廿周年寫眞帖』と略称）¹⁾に戦前期の移民住宅の写真やその他の関連情報が記録されており、沖山剛造家住宅²⁾の写真も掲載されている（図 2-2-1）。



一部二十五區 沖之株 菊一郎 氏（二十九歳）家族六名
氏は東京府八丈島三津根村出身 大正八年七月鎌倉丸にて渡伯所有地二十七町歩餘コーヒー一千株米作四町雜作一町二反歩あり。家長菊四郎氏は大正十二年死亡さる。寫眞は耕作地の遠望

図 2-2-1 写真帳に掲載された沖山家住宅（旧沖之株家住宅）

（出典：『イグアッペ植民地創立廿周年記念寫眞帖 1913-1933』）

向かって左側の部分は現在の納屋にあたる。手前（右側）の部分は、のちに増改築され、現在（図 2-2-4）のように東西に長い主屋の形状となった。

この写真のキャプションには「一部二十五区 沖之株菊一郎氏（二十九歳 家族六名）氏は東京府八丈島三津根村出身 大正八年七月鎌倉丸にて渡伯所有地二十七町歩餘コーヒー一千株米作四町雜作一町二反歩あり。家長菊四郎氏は大正十二年死亡さる。寫眞は耕作地の遠望」とある。この記述によれば、同住宅は写真集発行時点では沖之株氏が所有しており、その後沖山氏の所有となったと推察される。また、レジストロ植民地で初めに開拓された第一部に建設されたことや、旧居住者（沖山剛造の妻絹江氏）の口述（図 2-2-2）から推察される居住年³⁾を勘案すれば、建物が竣工した時期は、移住した 1919（大正 8）年から、写真帳が発行される直前の 1930（昭和 5）年頃であったと考えられる。

¹⁾ 海外興行株式会社『伯刺西爾イグアッペ植民地創立廿周年記念寫眞帖』1933 年発行。なお、日系移民の系譜については深沢正雪『一粒の米もし死なずば』（無明舎出版 2014 年）も参考にした。

²⁾ 竣工当時の所有者は、沖之株菊一郎であった。ちなみに、現地での聞き取り調査によれば、沖之株氏は、日本では大工ではなかったが、ブラジルでは大工として働いていたという。

³⁾ 聞き取りによれば、同住宅は建設から 80 年程経過しているという。



【沖山剛造の家】

「作ってから80年経つんじゃないかねえ。私？ 住み始めて50年になりますよ」と笑うのは、今年79歳で亡くなった沖山剛造さんの妻、絹江さん（72、二世、ノロエステ線グアラバス出身）。かつては多くの日本人が住み、馬車が家の前を通っていた道は今でも悪路で雨が降くと不通になる。カフェ、い草を干していたコンクリートの庭が往時を偲ばせる。現在、絹江さんはレジストロに住み、週末はこの家で過ごす。

レジストロ、イグアツペに残る初期移民の家や茶工場などが今年7月、リオ・ド・リベイラの文化風景として文化遺産に登録された。リオの国立歴史美術遺産院（IPHAN）の認定によるもので、日系の建築物としてはカザロン・ド・シャールモジ市、80年登録に次いで2件目。釘を使わない日本の手法ながら、ブラジル様式も漂わせる7日建築が興味深い。初期日本移民の息吹を残す全14点を紹介する。

OPHAN
連邦歴史遺産に認定！

図 2-2-2 沖山剛造家住宅に関する新聞記事

(ニッケイ新聞第三〇九五号 2010年8月25日付)

2) 沖山剛造家住宅の現状について

同住宅は北側に開けた庭（南半球のため、北側の庭は採光に適する）に面して、東西に長く主屋が配置されている（図 2-2-3）。



図 2-2-3 沖山剛造家住宅北面外観（2016年2月筆者撮影）

日当たりの良い北側に庭を構える（南半球のため）。正面左手が納屋、手前が主屋より北に設けられた庭で、コンクリート部分はコーヒー豆・い草の干場であった。

主屋は、西側の「主屋」と東側に連続する「納屋」からなり、「主屋」に増築されたと推察される「付属屋」が南側に建っている（図 2-2-15 平面図参照）。壁は真壁造で、天井は無く小屋組があらわれている⁴⁾。

関係者への聞き取りによれば、当初の住まいは納屋部分にあたり、現在の主屋は増築したものであるという⁵⁾。主屋は、敷地の高低差が影響してか、庭側は高床形式となり、庭に面して横長のベランダが設けられている。庭側から主屋へは、このベランダに庭から階段で登り、そこから各部屋へ入る。敷地内には、納屋の横に小屋⁶⁾がある。

間取りは、南半球で採光のよい北側にリビング（図 2-2-4）や仕事部屋が設けられ、南側（図 2-2-5）は台所（図 2-2-6）・浴室（図 2-2-7）・井戸のある下屋（図 2-2-8）といった水回り諸室が配されている。現地の堅木を手斧などで処理した荒々しい造りのため実測値の分析については更なる検討を要するものの、それらを概観すると、柱間寸法等には尺貫法の採用を想像させる 909mm や 1818mm に近い数値が多くみられる。



図 2-2-4 リビング内部



図 2-2-5 南側の下屋と離れ外観



図 2-2-6 台所内部



図 2-2-7 浴室裏側の焚口



図 2-2-8 井戸のある下屋

⁴⁾ 調査時、納屋と付属屋の屋根は修理中であった。
⁵⁾ 図 2-2-1 には増改築前の様子が見られる。
⁶⁾ この建物は、かつて養蚕小屋として使われていた。

納屋は、現在は外壁のない吹きさらしである。床面は 2/3 が板敷、1/3 が土間となっている。建設当初に住まいとして用いられていた際は、出入口部分は土間で、他は床張りであり⁷⁾、天井高の低い中二階⁸⁾を寝室として利用していたという。また、その後の主屋の増改築に際して、主屋との境界部分は 2 本の柱を取り去り、4 つ割として新たに 3 本の柱を立て、庭側 1 間を増築への出入口としている。

納屋（図 2-2-9）の柱の頭部は軒桁で繋がれ、そこに手斧仕上げの太い小屋梁が架けられている⁹⁾（図 2-2-10）。その中央には真束が立ち、棟木がのる。垂木が棟木から軒桁へと架けられ、瓦が葺かれている。



図 2-2-9 納屋の架構



図 2-2-10 納屋の小屋組み

主屋の北側の設けられたベランダ側の壁面には、おおむね半間ごとに柱を立て、その間を塗り壁として、柱間に扉または窓となる開口部が設けられている。開口部には内開きの板戸が付き、その上部は換気用の網戸張りの欄間となっている。柱は梁・桁を支え、長押や鴨居といった横材の使用は見られない。

主屋の小屋組は、柱の頭部に敷桁がのり、小屋梁が架けられている。そこに 2 本の束が立ち、もう一段の梁が架けられる、二重梁の架構となっている（図 2-2-16 断面図参照）。中央には小屋束が立ち棟木を支えている。

3) 窓枠形状について

主屋の窓枠は、額縁が四周をめぐる（図 2-2-11）。同住宅の土壁は上方に向かって傾斜しているためか、まぐさより上の柱部分が露出しており、そこから額縁と柱が一体化している様子が認められた。ただし、同住宅の解体調査の実施は不可能なため、類例として、同年代の日系移民住宅と考えられる六川家住宅の窓枠（図 2-2-12）を実測調査した。

⁷⁾ これらの点は現況と一致する。

⁸⁾ 聞き取りによれば、小屋裏は人が立てない位の高さであったという。

⁹⁾ 調査時の目視確認では、修理によって垂木と瓦は新しく取り換えられた様子が確認された。



図 2-2-11 北面ベランダに面する窓枠



図 2-2-12 六川家住宅の窓枠

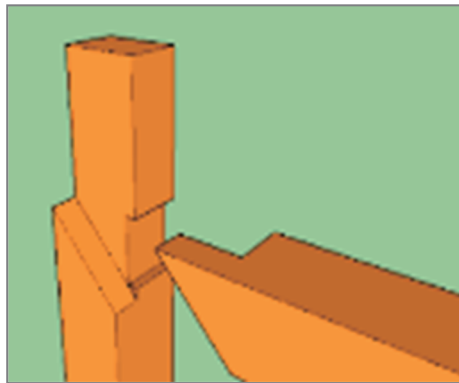


図 2-2-13 窓枠の仕口形状



図 2-2-14 小屋束の墨書

その結果、まぐさは柱を直接切り欠いた溝へ嵌め込むかたちになっており、額縁は、柱とまぐさ、または窓台と一体となり、コーナー部分は 45 度に加工され、仕口が隙間を生じることなく納められている (図 2-2-13)。

上記のような窓まわりの納まりは、戦前の日本の木造住宅には見られない特色と考えられる (こうした開口部形状の特徴に関する詳細は、本書第 3 章において検証する)。また、沖山剛造家住宅では、小屋組の部材に、日本建築に一般的に見られる墨書 (図 2-2-14 には「上三」という墨書が認められる) が確認された。これらの点から、同住宅は日本人大工の手によって、現地の木造住宅の特徴を活かしながら建設されたものといえる。それはこれまで同地域の関係者らによって纏められた資料の記述とも一致する。

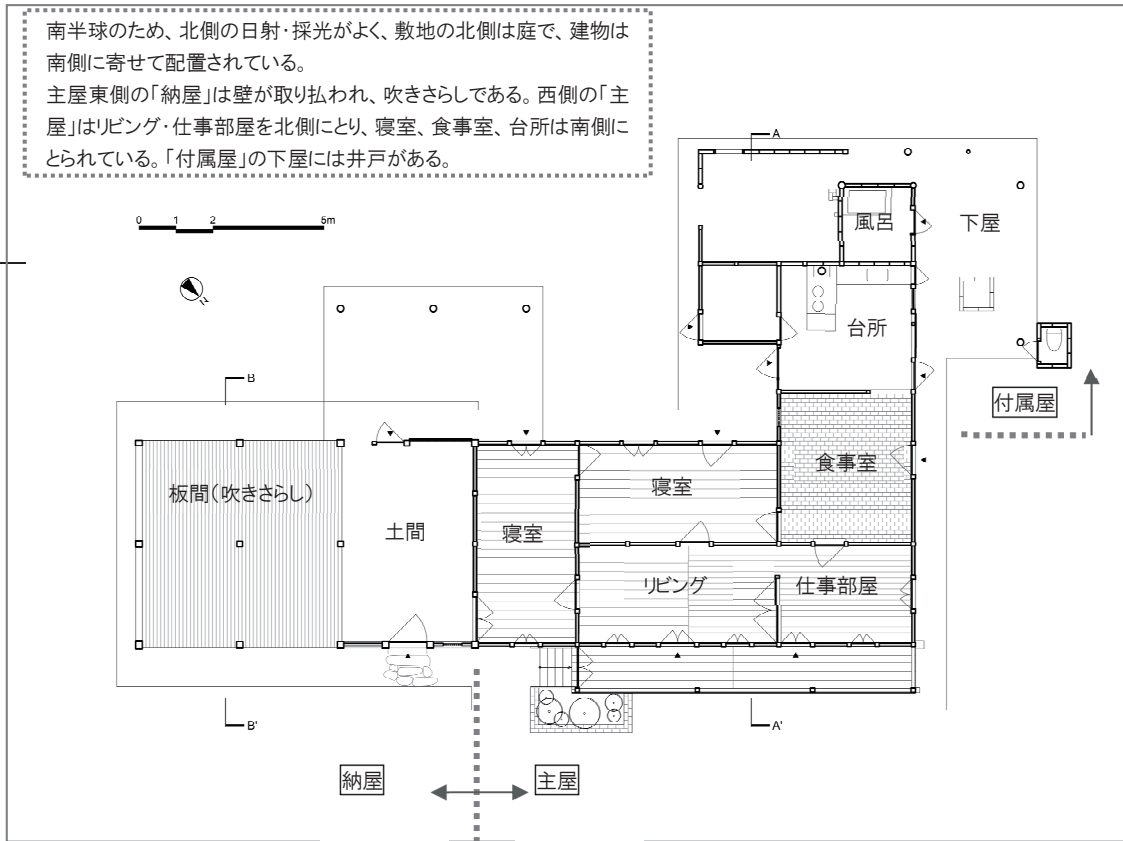


図 2-2-15 沖山剛造家住宅 平面図 (実測調査による)

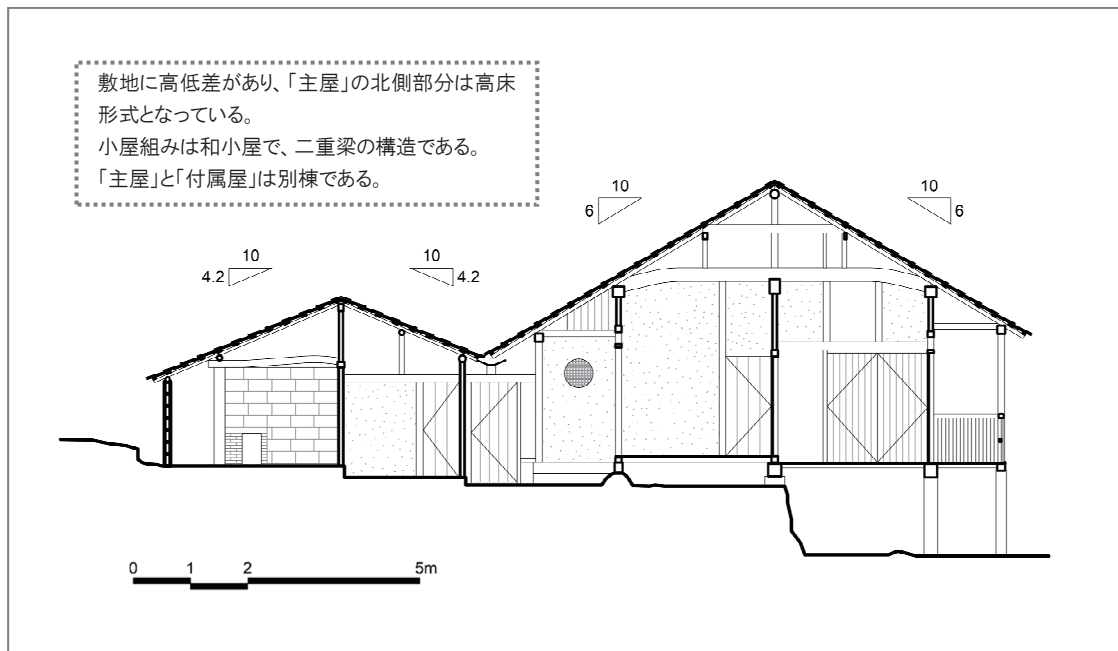


図 2-2-16 沖山剛造家住宅 断面図 (実測調査による)

4) まとめ

沖山剛造家住宅の特徴は、カネラプラッタと推察される堅木を用い、北側にベランダを配したもので、これらはレジストロにおける同時期の日系移民住宅に共通して見られるものといえる。また、地盤面から床面を高床とした住居形式は、六川家住宅にも見られ、土地の勾配や自然環境に由来した造りであると考えられる（なお、前掲の熊谷の論によれば、2階建ての日系移民住宅はレジストロ地域に特有の傾向のようである）。また、小屋組みには墨書と見られる痕跡も確認され、日本人大工の手によるものであることが確認された。

なお、沖山剛造家住宅では、畳の使用や床坐による生活の痕跡は見当たらなかった。この様子は、調査を行った日系移民住宅に共通して見受けられる。移民最初期の住宅ではこうした和式の生活様式を継承していた可能性も排除できないが、大正後期から昭和初期にかけて建設されたと考えられる剛造家住宅の住宅では、靴履きのままイス坐とベッドを用いた就寝による生活が営まれていた。

さらに、開口部の窓枠の形状に、日本の同時代の民家には見られない特徴的な納まりがみられることを指摘した。柱間寸法や開口部の配置傾向とともに一定の傾向が見いだされ、この点についてはあらためて後述する。